茨木市の支援教育
～茨木市教育研究会
支援教育部会の取り組み～

茨木市立白川小学校
前川　裕之

茨木市では教職員の自主的な研究活動の場として茨木市教育研究会（市教研）がある。その中で、支援教育部会は支援学級担任や支援教育に関心のある教職員で組織され、平成３０年度は２５０名近い教職員が参加している。

年間を通して、夏季研修会や講演会、資料集作成などを行っている。

１０月の定例会では、
『発達障がい児童・生徒の将来』
をテーマに、高等部卒業後の学びの場「ポポロスクエア」の千住　真理子先生に来ていただき、障がいのある児童・生徒の進路を考えるアドバイスをいただいた。

中学校卒業後の進路では、『支援学校高等部』だけでなく、高等専修学校、全日制高校、定時制高校、単位制高校、通信制高校とさまざまな進路選択があり、自分のペースで学ぶことができるということであった。

１１月の研修会では、
『課題を持つ子どもをどう理解し、どう集団につなげていくか』
～個人そして集団へのアプローチを探る～
をテーマに、４つの小学校・中学校の支援学級の先生方の実践報告があり、その後、『子ども・若もの支援ネットワークおおさか』の青木　道忠先生にご講演をいただいた。

友だちとの関係がうまく作れない児童へのアドバイスとして、『共感』『相談』『選択』『依頼』『促し』を基本に支援することが大切なこと。あいまいな表現でなく、具体的に、かつ理解の程度を確認しつつ支援を行うことを教えていただいた。

１２月の学習会では生野聴覚支援学校の先生に来ていただき、
『聴覚障害による聞き取りの難しさ』
『聞こえにくさや困り感のわかりにくさ』
などを話していただき、その後、聞こえのしくみ、『伝音性難聴と感音性難聴の違い』を説明していただき、実際に補聴器の体験やイヤマフでの難聴体験をした。

最後に、学校生活で配慮することを教えていただいた。

茨木市でも、経験の浅い教職員が増えてきており、支援学級担任も経験の浅い教職員が担うことが出てきている。そのようななかで、支援教育部会の取り組みが貴重な体験・交流の場となっている。

これからも市教研支援部会の活動を通して茨木市の支援教育の充実に取り組んでいってほしいと思います。